

# Eureka VI

六年制通信 No. 12 平成 30 年 7 月 13 日 (金) 号

## 時間をかけるべきこと

情報化社会と言われて久しいですが、立花隆によれば、これからの時代、人間が生きていくということは「生涯を情報の海にひとり一個の情報体として情報の新陳代謝を続けながら情報的に生きること」らしい。何を言っているのか私にはさっぱりわかりませんが、何かしら非常にせわしない生き方をしろと言っているような印象だけは受けます。この人によると、読書は情報を取り入れるのが目的で（それ以外にはなくて）、しかも情報は時間をかけずに大量に取り込まなくてはならないので、タイムコンシューミングな（＝時間を浪費するような）読み方は論外だということになります。これはこれで理路整然としていますが、私は読むのに時間のかからない本に出会ったことがないので、理解できません。私たちは限られた時間を生きるのですから、あらゆることを短時間で達成する方が効率的なのかもしれませんが、どうも私は「時短至上主義」になじめません。

ただし、手っ取り早くさっさと済ませべきことはあります。君たちの生活で言えば、受験勉強がそれに当たります。いつも言っていると思うのですが（**Truth stands repetition.**ですから繰り返します）、試験とは難しい問題を争って解くものではありません。制限時間内に解けるかどうかを測るものです。例えば、現在のセンター試験の英語は 80 分ですが、同じ問題を 120 分で解けと言われたら満点を取る生徒が続出するはずで、40 分ならほとんどの受験生が最後の問題まで行き着かないでしょう。時間軸を上手に立てることで受験生をふるいにかけている、それが入試の仕組みなのです。ですから、ゆっくり丁寧にマークを塗っていると落ちる。1 問ごとに迷っていると落ちる。時間をかけて文章を読んでいると落ちる。そういうことになるわけです。すべての動作を速くすること、これが受験生に求められる根本的なことだということを忘れてはいけません。受かるためには仕方のないことです。しかし、だからこそ、受験勉強というものはくだらないのだと私は思います。よく考える時間を与えないという点において、受験というシステムは君たちを鍛えない。制限時間があるということは、それ自体、試験問題に大きな制約を与えます。そのことを私たちも君たちも知っているから、受験に必要なかどうかということ、身につけるべき知識かどうかの指標としてしまいます。入試に出ないから覚えなくていい、という発想ですね。しかし、そんな考え方が正しいわけがない。それでも、多くの分野を勉強しなければいけない君たちにとって、この考え方は、時短という面からも有効なのでしょう。ただ、速く身につけた知識は速く忘れます。入試が終わったら、受験勉強の多くを忘れそうですね。

一刻も早く、こういう勉強とはおさらばしたいでしょうから、君たちは受験準備などさっさと済ませて下さいね。私の言いたいことがわかりますか。

さて、話は読書のことに戻りますが、私は読むのが非常に遅くて、これが一つの劣等感でもあるのです。松平千秋という学者がヘロドトスの『歴史』を訳しています。岩波文庫で3巻あります。これをお弟子さんの一人が読んだとき、松平先生から直接「どのくらいで読んだかね」と聞かれ、「はい、五日で読みました」と答えると、少し間を置かれて先生は「君い、僕はあれを訳すのに三年かかったんだぜ」と言われたそうです。私はこのエピソードが大好きなのですが、そのお弟子さんは克明にノートを取りながら読んだと言っていますから、並外れた集中力の持ち主でしょうね。私はこの本を（ノートを取らずにただ読むだけにしても）とても五日では無理です。世の中には早く読める人がいるものだと感心するとともに、自分の遅さに劣等感を抱いたわけです。でも、私たち一般人は、受験勉強ではないけれど、速く読んだものは忘れるのも早いですね。将棋の羽生さんも言ってましたけど、あの人は棋譜を勉強するのに1分あれば理解できるのですが、そういう勉強はすぐ忘れると。

私は、立花さんのような速読・多読を君たちにはすすめたくないね。そもそも読書は「見ぬ世の人を友とする」ことです。これは徒然草にある言葉です。徒然草の第十三段に「ひとり、燈のもとに文をひろげて、見ぬ世の人を友とするぞ、こよなう慰むわざなる」とあります。誰でも友になるには時間がかかるではないですか。ですから、君たちもゆっくり読めばいいと思います。私もそうしています。以前『遅読のすすめ』を紹介しましたが、著者の山村修さんは「月曜日の朝、あたらしい週を、あたらしい本とともに始める」と言うておられます。週に一冊ということですね。君たちも、読みたい本を読むときには、しっかり時間をかけましょう。

### 今週のおすすめ

・柴田 翔 『贈る言葉』 （新潮文庫）

高校生の頃に、芥川賞を受賞した『されど われらが日々』と『贈る言葉』を読みました。それから庄司薫の四部作へとつながっていった記憶があります。柴田さんは東大でドイツ文学を教え、晩年は『ファウスト』の新訳を出された方ですが、小説は学生運動華やかなりしころの青年たちを題材にしています。したがって、君たちには少し読みにくいかもしれません。

内容は、エリートの卵たちの観念的な恋愛、と言ったら言い過ぎかもしれませんが今の私には昔々の青春の、ほんの一角をのぞかせてくれる、ちょっと貴重な作品になっています。でも、今の若者には何のことやらわからないかもしれません。

どんな作品でも、作家はプロローグに凝るものですが、「ぼくは、満員の山手線に乗っていた。大学に入り、はじめての夏休みが終わって間もない、ある朝だった。」から始まる3ページだけでも読んでみて下さい。ああいう描写が、いわゆる純文学だと私は思っています。

BGMは竹内まりやの マンハッタン・キス でした…。